

M.K 東京大学大学院 工学系研究科 機械工学専攻 修士課程 1年

東京大学

工学部 機械工学科卒

このレポートを目にすることとなるのは長崎県の高校生、もしくは最近まで長崎県の高校生だった大学生が大多数であることと思います。ただ自分の4年間を振り返るのも良いですが、折角の機会なので彼ら後進を少しでも後押しするような内容でありたいと思い、そのような文章に仕立てることを目指します。大学生活^①情報のコーナーです。活かしてください。終わった今ではどれも当たり前のことのように感じますが、それを早くから自覚していることは大きなアドバンテージとなり得ます。

この文章の大きなテーマは「人に頼ろう」です。私自身の4年間がそのようなものであったことを反映しています。

大学生活^①情報1:何をやっても良い

大学生活ですが、誇張抜きで何でもできる4年間です。奨学金を受けて学生生活を送ろうとする人の中には、学費の免除などと組み合わせて経済的にも親からほぼ独立したような状態になる人も少なくはないことかと思えます。何でもできる、は自分で責任を持つ、の裏返しであり、高校以前とは使える時間、お金、その他諸々の規模が跳ね上がります。そのリソースを何に充てるかはその人次第であり、他のレポートでも様々な例が見られると思います。ここでは私の例を振り返りますが、自分はどう作戦を立て、環境をどう使いこなすのか、考える時間にしてもらえると幸いです。

大学生活^①情報2:何をやってる人もいる

一つのことに打ち込むことも素敵ですが、個人的には様々なことに手を出してみることをお勧めします。大学は学問をする場所であることはある程度事実であるように思いますが、それはそこに集まる人々が学問しかやっていない、ということの意味するわけではありません。大学には様々な人間がいること、その多くが学ぶことに好意的であること、そして自分がその人々に簡単に接触できる立場にいること。これに気づいてから私の大学生活が明確に加速しだしたことを覚えています。前期教養過程、後期専門課程、卒業研究、また現在の修士課程における研究、どれをとっても素人からのスタートでしたが、周りには常に先達がいって、求めればその先達が道を示してくれました。学問だけでなく部活動やサークル活動、あるいは趣味においてもそれは例外ではなく、知り合いの知り合い程度まで辿ればほぼ全ての事柄に関して何らかの有識者に辿り着く場合がほとんどでした。例えば私が新たに趣味で絵を始めたときには、サークルの友人、研究室の同期の知人、趣味の合う他大の人、イベントで知り合った人…と多くの人に助言を仰ぎました。大学やその他様々なコミュニティに属してみる、聞くことを恐れないこと、また自分の興味をなるべく人に話しておくこと。そういったコミュニケーションを行うことで必ず先達が見つかり、導いてくれます。こんなに楽しく、恵まれた環境はありませんでした。

大学生活③情報3:意外と助けてくれる

満ち足りた4年間でしたが、自分一人では乗り越えられないことばかりの4年間でもありました。そもそも財団や国の助けを受け(ようとし)ている時点で承知のことかもしれませんが、自分一人の力でどうにかなることはあまり多くありません。勿論できる限り自分で足掻くことは重要ですが、それと同じくらい人に助けを求めることも大切、ということをお願い知らされた4年間だったように思います。大きな例だと住んでいた大学の寮の都合でしばらく住む場所がなくなったときや、やりたい研究に100人近い人の協力が必要だった時など、幾度となく他人の助けを得て生き延びた大学生活でした。助けを得たのと同様に自分も誰かの助けになりたいと思い、活動を行いました。印象的なのは学部2年のころのサークルの新歓活動で、感染症の流行により孤独のうちに大学生活をスタートした新入生の居場所となる、とのコンセプトのもと新歓を行ったものです。当時の新入生とは今に至るまで持ちつ持たれつの関係である人も多く、また当時から10倍の規模となったサークルも私にとって大切なものとなりました。困ったら助け合ってみてください。そうして得たものは期待を超えてくると思います。

これは受け売りですが、いくらあっても人生を邪魔しないものとして、学問/人脈/お金があり、この順番で手に入る、という言葉があります。これは自分のような人間においては大方合っていて、学問をやることで世界が開け、多くの人との出会いがありました。これを読む皆様も多分そうだと思います。実は前2つを手に入れるためにも多少のお金が必要なのですが、幸いなことにそれについては財団に支援していただいているため心配は不要です。たくさん学問をやり、たくさん人と関わってみてください。きっとそれは何よりの財産となると思います。僕はそれで超面白い4年間を過ごすことができました。心の底からお勧めします。学問については(やるのは当然であり、また成果は論文で出るため)ここではあまり書きませんが、僕も大学院でもう少しそのような生活を続けることにしました。これを読む後進の未来はより輝かしいものになることと思います。そう祈っています。